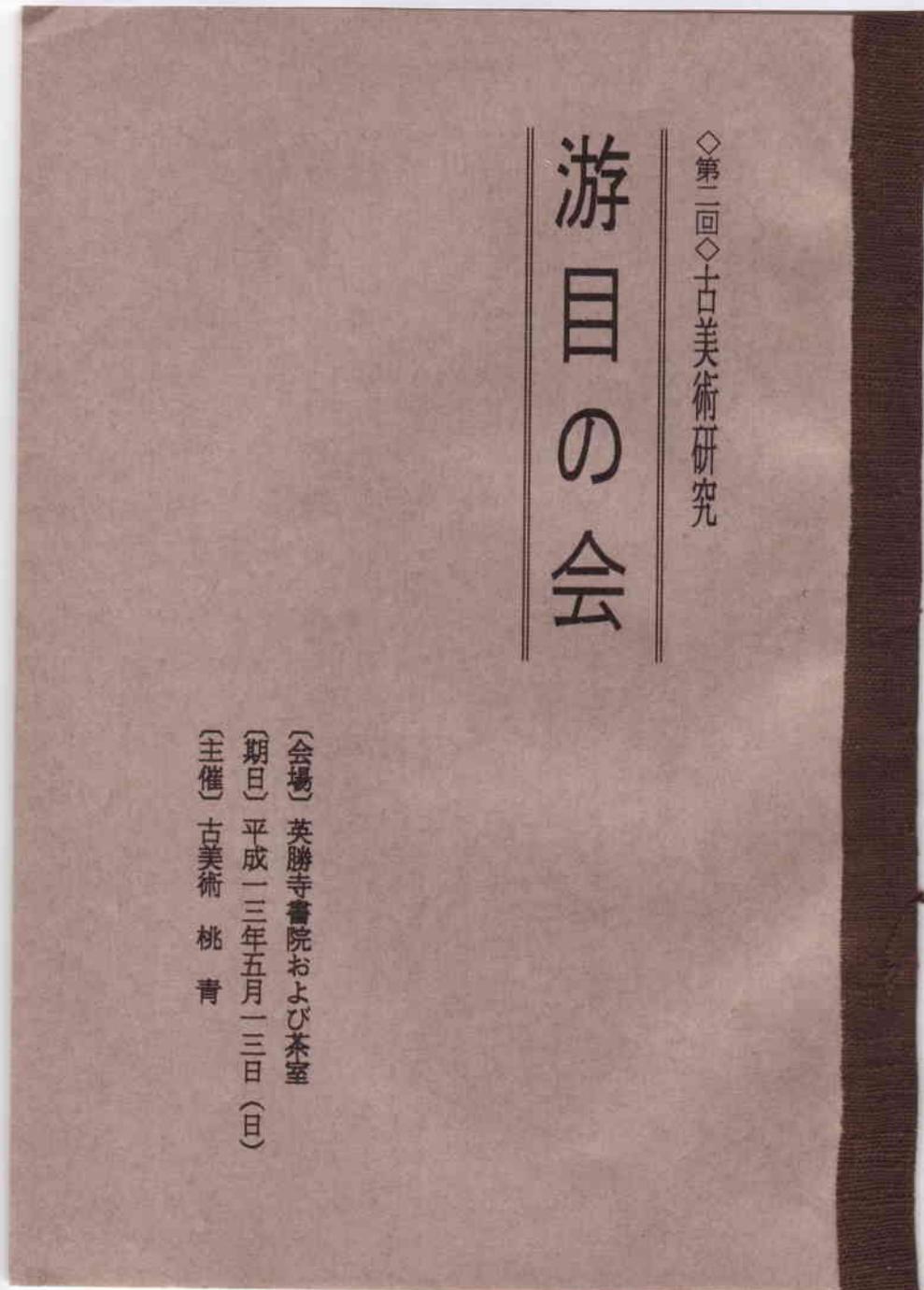


茶会の記録 (No. 1)

古美術桃青が主催した茶会(游目の会)のうち、雑誌『有楽(Yu-raku)』に掲載された茶会2つを紹介します。1つ目(No. 1)は英勝寺書院および茶室(鎌倉市)で行われたものです。なお、下は会記の表紙、右は掲載誌の表紙です。



古美術を楽しむ人の

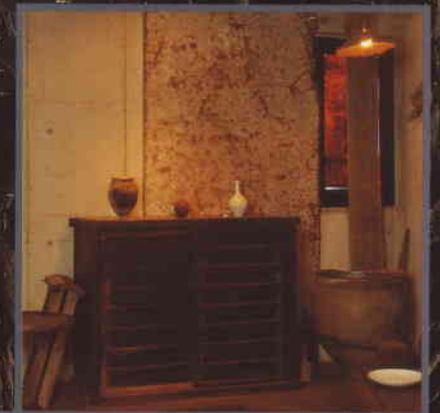
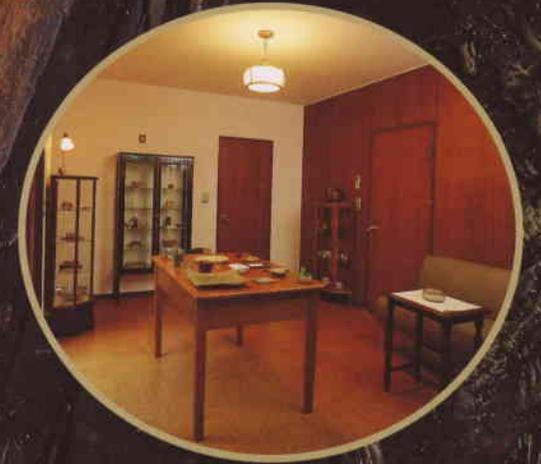
遊樂 YU-raku

No.85 JULY 2001

[特集]

骨董新感覚派

新古和洋にこだわらず自在に美を楽しむ



7

サークル 游目の会

神奈川県鎌倉の古美術店「桃青」に集う古美術愛好家の方々が、日ごろ研鑽を重ねてきた古美術品の研究発表を兼ねて茶会を開くと聞き、五月十三日、取材にうかがった。会場は鎌倉の古刹・英勝寺。当日は文字通り五月晴れの好天に恵まれ、英勝寺の庭には、かきつばた、都忘れなどの花々が咲き誇り、新緑の木々をわたる薫風に今を盛りと鳴くうぐいすの音が混じる。受付脇の板床には古格のある狛犬が鎮座し、時節の花を入れた縄文注口土器とともに客を迎える。控えの書院広間の床は彭城百川筆「群賢書畫展観図」の掛軸に、男山焼染付吉祥文の筒花入。

当日の眼目である特別展示の一つは、久保田喜嗣・由美子夫妻による「琉球漆器と紅型裂」のコレクションである。沈金や螺鈿、箔絵など、さまざまな技法の施された琉球漆器が華やかな紅型とともに書院広間に展示され、見ごたえのあるコーナーとなっていた。

もう一つの特別展示は薄茶席の茶室広間に飾られた、この季節にふさわしい兜鉢三頭。中央はNHKの大河ドラマで今話題の蒙古軍が使用した鉄黒漆塗りの兜で、元時代にさかのぼる希品であるという。その左右に桃山時代の烏帽子形兜と七十二間小星兜が配されている。この展示品については所蔵者の藤田玄嗣氏による詳細な研究レポートが参加者に配付され、氏みずからの解説も聞くことができた。

こうした趣向は通常の茶席では味わえぬ貴重な眼福の時を体験させてくれて、さすが古美術愛好家らしい茶会だと感服する。

濃茶席、薄茶席の道具立てにも、そんなスタイルが一貫している。それぞれのコレクターが持ち寄ったものを取り合わせたと聞いたが、質の高い古美術品を季節感に合わせて巧みに配しながら、それらを鑑賞し、かつ使うという楽しさを満喫させてくれた。佐藤珠園さんによる花も古器とよく調和して初夏の風情をかもし出す。なにより、日ごろ親交のある古美術好きの間が集まって、なごやかな談笑のうちに進む茶会でありながら、その進行が流れるように凍と凍しているのが気持ちよい。

古美術品の鑑賞と茶の湯が別途をたどりつつあり、箱書中心のかた苦しい茶会が幅をきかせる昨今、こうした試みは実に新鮮であった。今回が二回目ということであるが、今後長く続くことを願ってやまない。

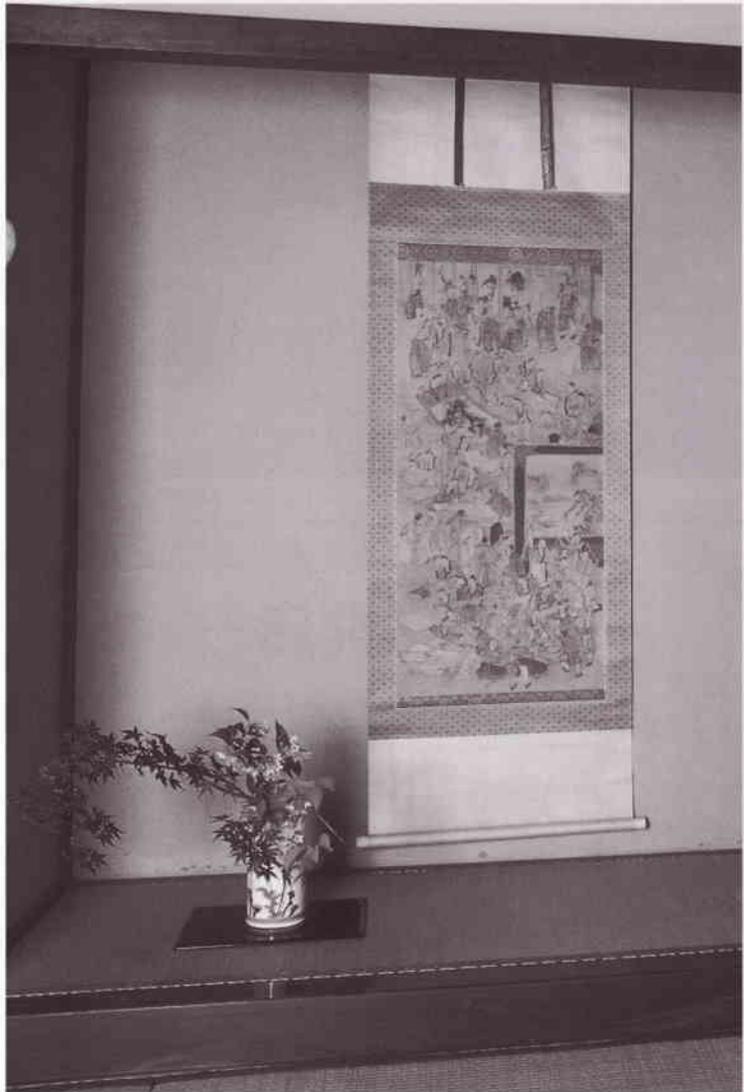
*カラー図版40・41ページ

(編集部)



書院広間の床

受付脇で客を迎える縄文注口土器



濃茶席

- 床 清水切(天蓋蓮台経) 伝後鳥羽天皇筆 鎌倉時代初期
- 花 円葉空木 姫早百合
- 花入 竹製華籠 室町時代
- 釜 博多芦屋松梅文立口撫肩釜 桃山時代
- 炉 時代木地炉 緑
- 水指 古丹波水指 鈴木宗閑箱 銘「大江山」 江戸時代初期
- 茶入 桜蔭給肩衝茶入 桃山時代
- 仕覆 茶地花唐草文銀襦
- 替茶器 青磁白黒象嵌鶴菊文小壺 高麗時代後期
- 茶杓 大徳寺第三四一世大龍宗大作 共筒共箱 銘「存外」 江戸時代中期
- 茶碗 魚屋茶碗 李朝時代前期
- 蓋置 御本茶碗 李朝時代前期
- 建水 時代竹蓋置
- 茶 佐波里建水 江戸時代初期
- 菓子 松江・中村茶舗製「出雲の昔」 鎌倉・蕉雨庵製「唐衣」
- 菓子器 素三彩陰刻飛龍文鉢 明時代後期 練(込み)志野輪花台鉢 桃山時代

薄茶席

- 床 蘆葉達磨図 遂翁元盧画・東嶺圓慈撰 江戸時代中期
- 花 枯蘆 カラー
- 花入 鉄鉢 鎌倉時代
- 香合 根来香合 桃山時代
- 風炉先 雪月花 豊福迎聴書
- 釜 霰釜 桃山時代
- 風炉 三ツ花弁形尼面脚鉄風炉 室町時代
- 数瓦 総織部数瓦 桃山時代
- 水指 御本水指 李朝時代前期
- 薄器 牡丹文鎌倉彫茶器 桃山時代
- 茶杓 竹茶杓 円谷智宣作
- 茶碗 蕎麦茶碗 李朝時代前期
- 茶碗 菽茶碗 銘「山里」 江戸時代初期
- 薩摩火計茶碗 江戸時代初期
- 丹波茶碗 銘「岩松」 桃山時代
- 蓋置 唐物三つ人形蓋置 明時代前期
- 建水 曲建水
- 水次 高台寺時絵椽 千種家伝来 桃山時代
- 茶 西尾・あいや西条園製「風の香り」
- 菓子 赤坂・塩野製「青楓と香魚」
- 菓子器 唐物独楽盆 一六一七世紀 唐物密陀牡丹文輪花盆 正木直彦箱 一七世紀



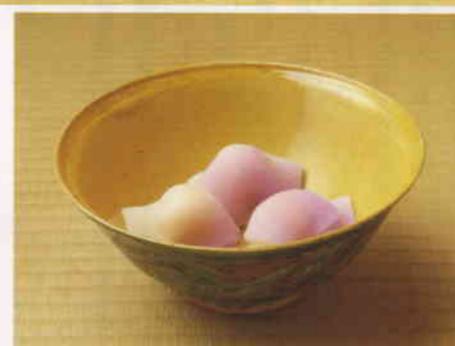
〔特別展示〕兜鉢

薄茶席



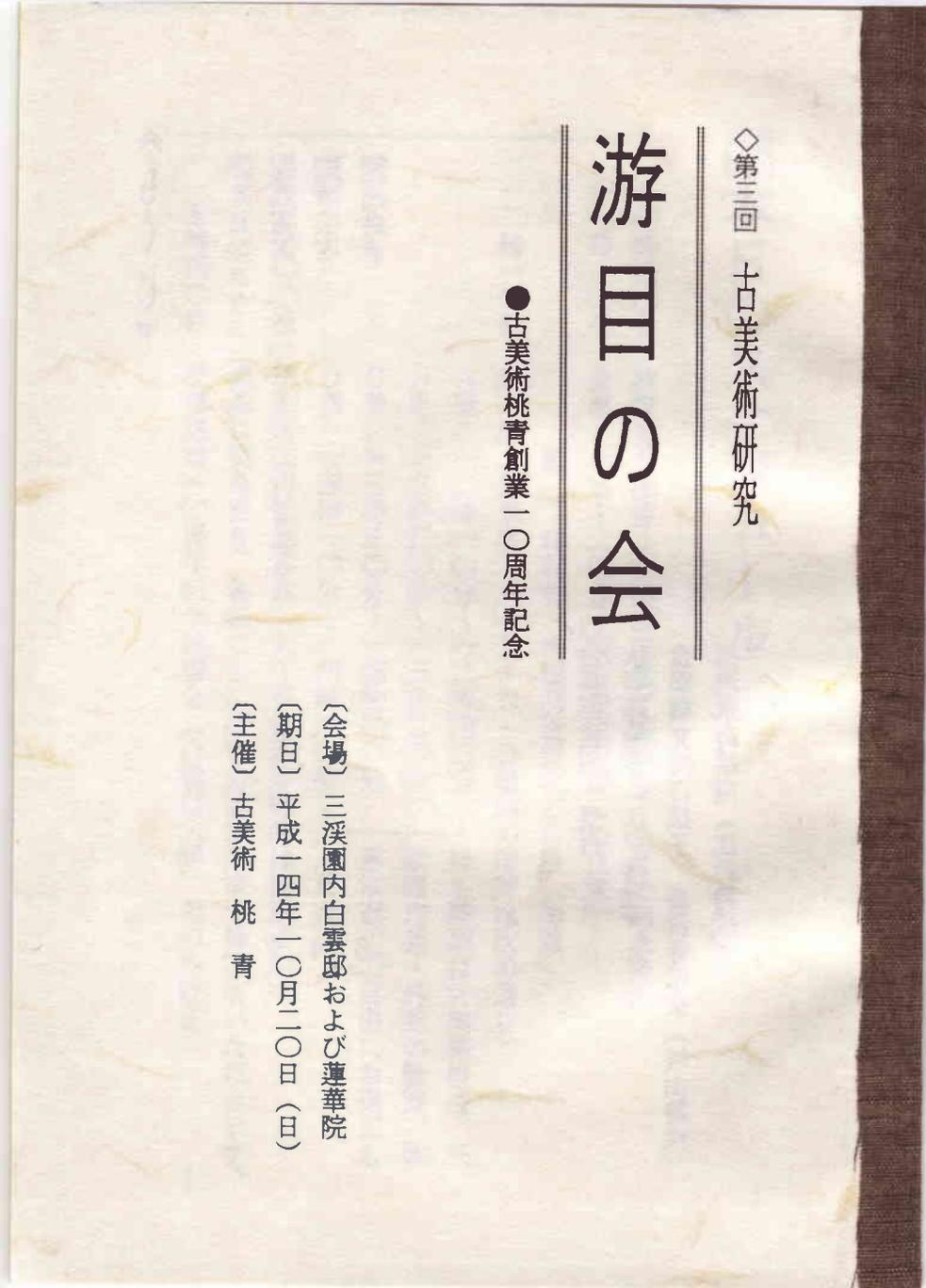
〔特別展示〕琉球漆器と紅型裂

濃茶席



茶会の記録(No. 2)

古美術桃青が主催した茶会(游目の会)のうち、雑誌『有楽(Yu-raku)』に掲載された茶会2つのうちの2つ目(No. 2)です。この茶会は三溪園内の白雲亭と蓮華院(横浜市)で行われました。なお、下は会記の表紙、右は掲載紙の表紙です。



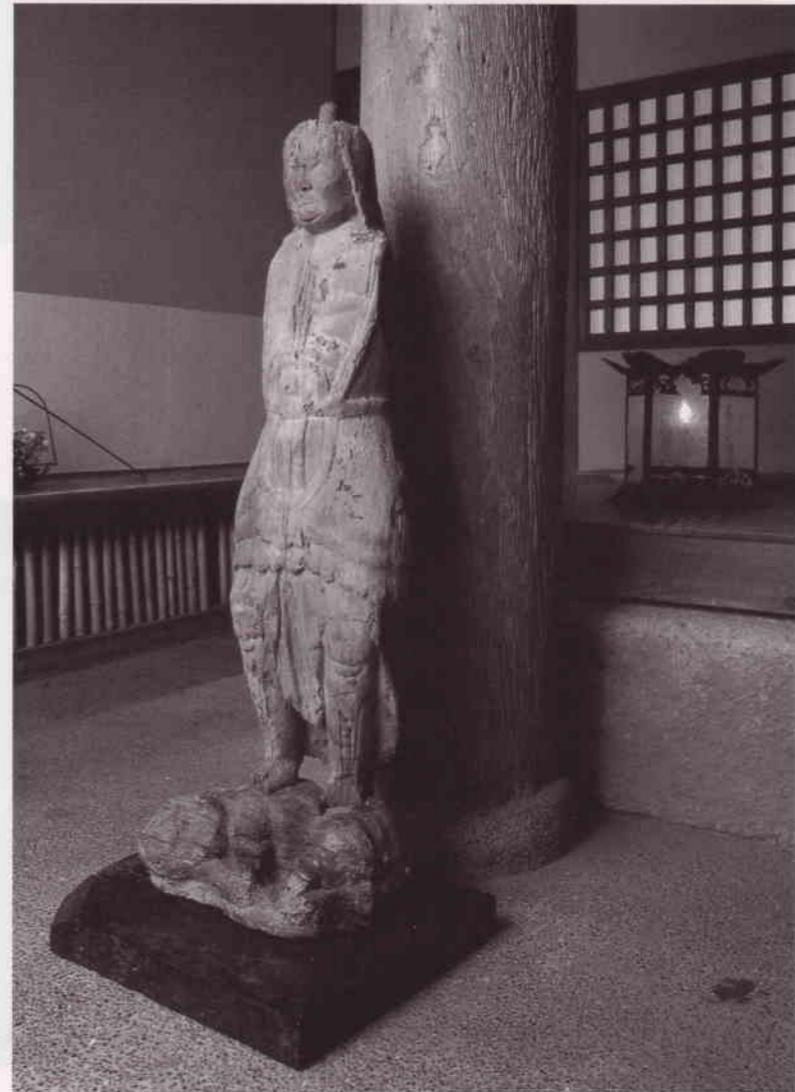
サークル 第三回 古美術研究 游目の会

鎌倉の古美術「桃青」が主催する「游目の会」は今年で三回目を迎える。昨年は新緑の五月、鎌倉の英勝寺で開催されたが（本誌85号）、今回は秋の気配の深まりゆく十月二十日、横浜・三溪園の白雲邸と蓮華院で行われた。

前夜の天気予報は大雨であったが、幸い当日は薄曇りで、午後には薄日さえ射す心地よい秋の一日となった。白雲邸玄関では秋草蒔絵桶と金銅桐文両口銚子に生けられた秋の花が参会者を迎える。

蓮華院の待合入口の土間中央には原三溪によって平等院古材の太い柱が据えられているが、その前に平安の毘沙門天立像が置かれて、この茶事が仏教美術を中心とした道具立てとなることを暗示している。

案の定、濃茶席の床は中尊寺金銀交書経。輪宝蒔絵説相箱の花入には枯れ蓮と一輪の白なでしこが生けられ、そこに金銅供養者像が添えられている。枯れ蓮と金銅の色のコントラストが



毘沙門天立像 平安時代 鉄製灯籠 伝熱田神宮伝来 室町時代

絶妙である。床脇には平安の男女の神像が安置され、大壇脇机には金剛盤、五銚鈴、五銚杵などの金銅仏具が置かれて、神秘的で静謐な空間を演出している。

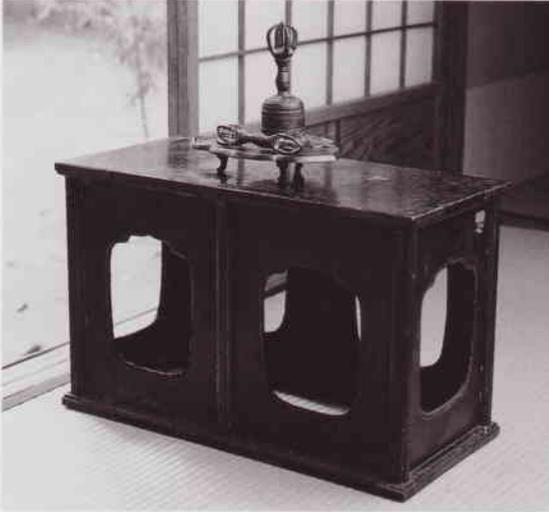
白雲邸の薄茶席は、がらりと趣向が変わる。床に甘露寺元長の流麗な「女郎花」の短冊が掛かり、室町の一節切の笛が添えられている。美濃伊賀の花入に小ぶりの柿の枝と菊が生けられ

て、明るく華やいだ雰囲気を出す。

二つの対照的な茶席に臨んで、古美術品を所を得て使いこなしながら、その美しさを茶事の中で存分に楽しもうとするこの会の趣旨がみごとに実現されていると感じた。また益田鈍翁や原三溪など明治の茶人たちが追究した自由な茶に通じる世界を眼前に見る思いで、充実した一日であった。（カラー図版58・59ページ）



女神像・男神像 平安時代



大壇脇机 室町時代 金銅五銚杵・金銅五銚鈴・金剛盤 鎌倉時代

濃茶席	蓮華院	床	藤原清衡金銀交書経（中尊寺経）断簡 平安時代
花	時のもの	花入	輪宝蒔絵説相箱 室町時代
	添えて		金銅供養者立像（北魏〜東魏時代）を添えて
釜	芦屋菊散らし文平釜		室町時代
炉縁	木地		江戸時代
水指	古備前種壺		室町時代
茶入	瀬戸皆口		室町時代
茶杓	竹 伝武野紹鸕作		室町時代
茶碗	本手蕎麦		李朝時代
	古萩 銘「巖」		江戸時代
蓋置	金銅火舎香炉		明時代
建水	曲げ		
茶	京都・柳桜園茶舗製「錦上の昔」		
菓子	小石川・一幸庵製「公孫樹」		
菓子器	織部平瓦		桃山時代
入口	毘沙門天立像		平安時代
待合	鉄製灯籠 伝熱田神宮伝来		室町時代
	鉄製吊りかがり 伝東大寺二月堂伝来		
棚	男神像・女神像		室町時代
その他	金銅五銚杵・金銅五銚鈴・金剛盤		鎌倉時代
	大壇脇机		室町時代

薄茶席	白雲邸茶室	床	短冊「女郎花」甘露寺元長筆 室町時代
		花	「一節切」（室町時代）の笛を添えて
花入	美濃伊賀耳付	花入	室町時代
棚	冊子本「和歌題林抄」細川家伝来	冊子本「御賀」徳川家伝来	室町時代
	冊子本「御賀」徳川家伝来	根来料紙箱	江戸時代
結界	金銅獅子経枕（鎮紙）	金銅獅子経枕（鎮紙）	室町時代
釜	ざくろ瑠璃鳥文欄間	天明遠山銀付平釜 小堀家伝来	北魏時代
水指	古染付芙蓉手松鶴文輪花鉢	石黒況翁旧蔵	桃山時代
薄器	秋草蒔絵聚		明時代
茶杓	蝶蜂蒔絵		桃山時代
茶碗	竹 銘「拾子」了々斎作共筒共箱		桃山時代
	圓能斎外箱		江戸時代
蓋置	胡銅三閑人		桃山時代
建水	佐波里		李朝時代
水次	高台寺蒔絵椽 千種家伝来		李朝時代
茶	京都・柳桜園茶舗製「雅の白」		桃山時代
菓子	赤坂・塩野製「山茶花」		江戶時代
菓子器	漆皮輪花盆		宋時代
	根来八角盆		室町時代



薄茶席



秋草蒔絵桶 江戸時代



金銅桐文両口銚子 高台寺伝来 桃山時代



鉄製吊りかがり 伝東大寺二月堂伝来 室町時代
*花はすべて佐藤珠園

濃茶席



織部平瓦 桃山時代